

行為者性の感覚

佐藤 広大 (Kodai Sato)

筑波大学

行為者性の感覚 (sense of agency) とは、自分がある行為の行為者であるという感覚、つまり、自分がその行為を開始・制御・終了させているという感覚である。たとえば、私は今、自分が文字を入力しているという感覚を持っていて、他人がこの文字を入力しているという感覚は持っていないし、この文字の入力が反射のように自動的に生じているという感覚も持っていない。

この行為者性の感覚を用いれば、意図的行為の解明も進むように思われるかもしれない。なぜなら、通常、意図的行為には行為者性の感覚が伴うからである。しかし、話は、それほど単純ではない。たとえば、私たちは、自分がした意図的行為ではないものに対して、行為者性の感覚を持ってしまうことなどがあるからである (Wegner & Wheatley 1999)。そこで課題となるのは、行為者性の感覚が生じる仕組みを明らかにすることである。その仕組みが明らかになれば、行為者性の感覚が自分がした意図的行為ではないものに対して生じた場合を、例外として処理できるようになるかもしれない。

行為者性の感覚が生じる仕組みについては、まず二つのモデルが存在している。一つ目の「比較モデル」によれば、〈運動をするときに生じる運動命令のコピー〉と〈実際の運動の結果に関する感覚〉とを (サブパーソナルに) 比較して一致していれば、行為者性の感覚が生じる (Braun et al. 2018, p.6)。このモデルに対する反論としては、比較モデルは、行為者性の感覚を生じさせるサブパーソナルな状態や過程が、行為者の (パーソナルな) 意図や信念からある程度独立に働くと考えてしまっているといった反論がある (Mylopoulos & Shepherd 2020, pp.168-169)。

二つ目の「推論モデル」によれば、行為者性の感覚は、意図が観察された行為に先行するなどしているときに、回顧的な推論から生じる (Braun et al. 2018, p.7)。このモデルに対する反論としては、推論モデルは〈行為者性の感覚が生じたという報告〉と〈行為者性の感覚が実際に生じたこと〉とを混同してしまっているといった反論がある (Cf. Walter 2014, p.2226)。

この二つのモデルを折衷しようとしているのが、「重みづけモデル」である。このモデルによれば、行為者性の感覚は、様々な合図がその場で重みづけされることによって生じる。このモデルは、多くの場面で比較モデルが捉えるような仕方では行為者性の感覚が生じることを認めるが、別の場面では推論モデルが捉えるような仕方では行為者性の感覚が生じることもあると主張する。重みづけモデルに対する反論としては、このモデルは、行為者性の感覚を生じさせる合図にどのようなものがあるか明らかにしていないので、偽になりづらいといった反論がある (Braun et al. 2018, p.8)。

そこで、ようやく登場するのが本発表で中心的に扱う「メタ認知モデル」である。このモデルによれば、行為者性の感覚は、行為のスムーズさ (行為の実際の感覚的な結果

と、予測された感覚的な結果との比較)についてと、行為の結果(行為の結果が、事前の意図に照らしてどれくらい成功しているか)についてのメタ認知から生じる(Carruthers 2015, p.1)。このモデルも、重みづけモデルと同様に、比較モデルと推論モデルの折衷と見なすことができる。しかし、メタ認知モデルが、重みづけモデルと異なるのは、行為者性の感覚を生じさせる合図を、行為のスムーズさについてと行為の結果についてのメタ認知だけに限定している点である。このように限定することによって、重みづけモデルの弱点であった、「行為者性の感覚を生じさせる合図にどのようなものがあるか明らかにしていないので、偽になりづらい」という点を克服している。しかし、行為者性の感覚を生じさせるのは、本当にこうしたメタ認知だけなのだろうか。そして、何が行為者性の感覚を生じさせる合図になるかということに、個人差はないのだろうか。さらに、行為者性の感覚を生じさせる合図について、その合図が正しいとか間違っていると言うことができるのだろうか。

本発表では、メタ認知モデルを批判し、重みづけモデルを支持する。そのために、次の三つのことを行う。第一に、そうしたメタ認知だけでなく、行為の負の結果についての認知なども、行為者性の感覚を生じさせるという実験結果を紹介する。第二に、何が行為者性の感覚を生じさせる合図になるかについて、個人差や文化差がありうることを示す。第三に、行為者性の感覚というものが生まれた起源や機能を踏まえると、行為者性の感覚を生じさせるある合図について正しいとか間違っていると言うためには、かなり複雑な基準が必要になると主張する。

本発表は、重みづけモデルを支持することによって、行為者性の感覚が生じる仕組みはかなり複雑であり、そうした感覚だけを手掛かりにして意図的行為を解明するのは困難かもしれないということを示すだろう。

参考文献

- Braun, N., Debener, S., Sychala, N., Bongartz, E., Sörös, P., Müller, H. H. O., & Philipsen, A. (2018), "The senses of agency and ownership: A review," *Frontiers in Psychology* **9**, Article 535.
- Carruthers, G. (2015), "A metacognitive model of the feeling of agency over bodily actions," *Psychology of Consciousness: Theory, Research, and Practice* **2** (3), 210-221.
- Mylopoulos, M. & Shepherd, J. (2020), "The experience of agency," in Kriegel, U. (ed.), *The Oxford Handbook of the Philosophy of Consciousness*, Oxford University Press, 164-187.
- Walter, S. (2014), "Willusionism, epiphenomenalism, and the feeling of conscious will," *Synthese* **191** (10), 2215-2238.
- Wegner, D. M. & Wheatley, T. (1999), "Apparent mental causation: Sources of the experience of will," *American Psychologist* **54** (7), 480-492.